

展示室 1 18 - 19 世紀イギリス絵画



バーン=ジョーンズ《フローラ》

18 世紀から 19 世紀にかけて、いち早く産業革命を成し遂げたイギリスは、美術の分野でもこの時に黄金時代を迎えます。肖像画は、18 世紀後半に入りホガースやゲインズボロ、レイノルズの出現によって確立されました。また、それまでの絵画のジャンルの中で最も低いものに入るとされてきた風景画は、画家たちが自然を見直すことによってイギリス国内で発展していきます。19 世紀前半に現れた二人の偉大な風景画家、ターナーとコンスタブル。彼らの作品はバルビゾン派や印象派にまで波及しています。さらに 19 世紀中頃、ロセッティらを中心にラファエル前派同盟と称した画家たちが美術運動を起し、イギリスのみならず周辺諸国にも影響を与えました。

今回は、幅広い魅力を持つ 18 - 19 世紀イギリス絵画をご紹介します。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
トマス・ゲインズボロ	荷馬車のいる丘陵地帯の森の風景	1745 - 46 頃	油彩・キャンバス
ジョン・クローム	ヘレスドンの眺め	1807 頃	油彩・キャンバス
ジョン・セル・コットマン	ルーアン、ラ・ピュセル広場のブルトルド館	1823	水彩・紙
ジョン・マーティン	フレッシュウォーター・ベイ	1815 頃	油彩・キャンバス
トマス・ガーティン	エクセター大聖堂	1798 頃	水彩・紙
ジョン・コンスタブル	デダムの谷	1802	油彩・紙、キャンバス
ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー	カンバーランド州のコールダー・ブリッジ	1810	油彩・キャンバス
ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー	サン・ゴータル峠の下り道	1848	水彩・紙
サー・トマス・ローレンス	ラビー・ウィリアムズ牧師	1790 代初頭	油彩・キャンバス
ウィリアム・ホガース	サミュエル・マーティンの肖像	1758 - 60 頃	油彩・キャンバス
サー・ジョシュア・レイノルズ	キティ・フィッシャーの肖像習作	1760 - 62 頃	油彩・キャンバス
サー・ジョシュア・レイノルズ	エグリントン伯爵夫人、ジェーンの肖像	1777	油彩・キャンバス
トマス・ゲインズボロ	オース夫人の肖像	1767	油彩・キャンバス
アルバート・ジョゼフ・ムーア	黄色いマーガレット	1881	油彩・キャンバス
サー・エドワード・コーリー・バーン=ジョーンズ	フローラ	1868 - 84	油彩・キャンバス
ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス	フローラ	1914 頃	油彩・キャンバス
ダンテ・ガブリエル・ロセッティ	マドンナ・ピエトラ	1874	パステル・紙

展示室 2 日本の油彩画



高橋由一  
《風景（烏山山）》

油彩画は、数百年にわたり多くの画家によって描かれ、今日に至るまで数々の変遷を重ねてきました。絵具の混ぜ方や重ね方、油の配合、筆致などを変えることで表現は無限に広がります。

日本で油彩画が本格的に普及し始めたのは明治時代のことでした。それまでの日本の絵画とはまったく異なる、遠近法や明暗法による迫真的な表現は、当時の日本人画家たちに衝撃を与えます。1860 年代中頃、高橋由一、五姓田義松は、当時横浜を拠点にしていたイギリス人報道画家チャールズ・ワーグマンから油彩技法を学びます。1896 年には東京美術学校の中に西洋画科が設置され、黒田清輝、藤島武二、和田英作など以後の日本の美術界をけん引する画家たちが指導にあたりました。こうして歩み出した日本の油彩画は、時を経て独自の画境に到達していきます。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
百武兼行	風車のある風景	1877 (明治 10)	油彩・キャンバス
五姓田義松	婦人像	1871 (明治 4) 頃	油彩・キャンバス
高橋由一	風景 (烏山山)	1880 代	油彩・キャンバス
諫山麗吉	甲州猿橋		油彩・キャンバス

作者名	作品名	制作年	技法・材質	
浅井 忠	収穫	1893 (明治 26)	油彩・紙、板	
広瀬孝次	田園景色	1890 (明治 23)	油彩・キャンバス	
山本芳翠	園田銚像	1885 (明治 18)	油彩・キャンバス	
黒田清輝	東久世伯爵肖像エスキース	1894 (明治 27)	油彩・キャンバス	
原 撫松	婦人像	1906-07 (明治 39-40) 頃	油彩・キャンバス	
高橋勝蔵	桃と葡萄	1909 (明治 42) 頃	油彩・キャンバス	
伊藤快彦	夏の静物		油彩・板	
野崎華年	富士	1907 (明治 40)	油彩・キャンバス	
白瀧幾之助	農婦と牛のいる風景		油彩・キャンバス	
武内鶴之助	虹 (英国牧場風景)		油彩・キャンバスボード	
和田英作	上総風景	1897 (明治 30)	油彩・キャンバス	
山本森之助	冬の磐梯山	1918 (大正 7) 頃	油彩・キャンバス	
高木背水	紅海の夕焼		油彩・キャンバス	
栗原忠二	ヴェニス風景	1921 (大正 10)	油彩・板	
岸田劉生	銀座と数寄屋橋畔	1911 (明治 44) 頃	油彩・板	
中村 彝	朝顔	1923 (大正 12)	油彩・キャンバス	
古賀春江	蝸牛のいる田舎	1928 (昭和 3)	油彩・キャンバス	
藤島武二	「耕到天」習作	1936 (昭和 11)	油彩・キャンバス	
山中春雄	湖		油彩・キャンバス	武田光司コレクション寄贈

### 展示室 3 佐藤昭一とその時代



佐藤昭一《夜の灯A》

1950年代、日本は迅速な復興と経済成長をとげます。しかし、その陰には様々な社会問題を孕んでいました。そこに眼を向けた一部の前衛系の画家たちは美術によってそのひずみを糾弾します。その動きは地方へも広がり、郡山は全国でも屈指の活動拠点となったのです。その中心には佐藤昭一（1927-2018）がいました。

その佐藤昭一は昨年91歳で逝去しました。郡山の戦後の美術文化活動をけん引してきた佐藤の業績を偲び、今回の展示をもって郡山から全国へメッセージを発信した1950年代をとりあげ、振り返りたいと思います。

作者名	作品名	制作年	技法・材質	
佐藤昭一	静物	1944 (昭和 19) 頃	油彩・紙	佐藤昭一氏寄贈
佐藤昭一	マフラーの自画像	1945 (昭和 20) 頃	油彩・キャンバス	佐藤昭一氏寄贈
佐藤昭一	自分と石膏とマンドリンと壺	1948 (昭和 23)	油彩・キャンバス	佐藤昭一氏寄贈
佐藤昭一	食事	1952 (昭和 27)	油彩・板	佐藤昭一氏寄贈
佐藤昭一	夜の灯A	1956 (昭和 31)	油彩・キャンバス	佐藤昭一氏寄贈
佐藤昭一	廃坑	1956 (昭和 31)	油彩・キャンバス	佐藤昭一氏寄贈
鎌田正藏	製塩工場・小名浜	1947 (昭和 22)	油彩・キャンバス	鎌田正藏氏寄贈
鎌田正藏	製塩工場	1947 (昭和 22)	油彩・キャンバス	鎌田正藏氏寄贈
芳賀忠行	虚構の風景-城	1974 (昭和 49)	油彩・キャンバス	
中村 宏	島	1956 (昭和 31)	水彩、墨、鉛筆、インク・紙	
池田龍雄	化け物の系譜シリーズ『像』	1956 (昭和 31)	インク、コンテ・紙	
池田龍雄	禽獣記シリーズ『めん鳥』	1957 (昭和 32)	インク、コンテ・紙	
山下菊二	顔の中の顔	1963 (昭和 38)	油彩、コラージュ・キャンバス	
尾藤 豊	川口鋳物	1954 (昭和 29)	油彩・キャンバス	
高山良策	漁夫	1958 (昭和 33)	油彩・キャンバス	
石井茂雄	戒厳状態 I -暴力シリーズより-	1956 (昭和 31)	油彩・キャンバス	
佐藤昭一	シリーズ人間 88	1988 (昭和 63)	アクリル・キャンバス	
佐藤昭一	シリーズ透過 02	2002 (平成 14)	アクリル・キャンバス	

## 展示室4 吉田博・ふじを・穂高



吉田博  
《花のある風景》

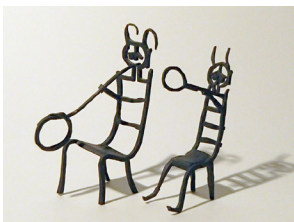
吉田博（1876-1950）の家系は画家一家として知られています。風景画の第一人者として活躍した博は、福岡県久米市に生まれました。大正後期からは木版画に積極的に取り組み、洋画の表現を版画に融合させました。湿潤な日本の風景をとらえた博の作品は、ダイアナ妃や精神分析学者フロイトなど世界中の人々を魅了し続けています。

博の妻である吉田ふじを（1887-1987）は、16歳のときに博とともにアメリカへ渡りました。シカゴ、ボストンなど各地で水彩画の展覧会を開催し、好評を得ました。風景画をはじめ、日常の情景や花などをみずみずしい筆致で描きました。

博、ふじをの次男として生まれた吉田穂高（1926-1995）は、幻想的な風景や静寂に包まれた建物のある風景を得意としました。シルクスクリーンや写真製版を併用した木版画により、独自の版画表現を生み出しました。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
吉田博	上野、東照宮	1894（明治27）	鉛筆・紙
吉田博	山村風景	1896（明治29）	鉛筆、淡彩・紙
吉田博	檜原下川のつなさんの馬	1908（明治41）	水彩・紙
吉田博	『瀬戸内写生旅行』より「帰帆」	1911（明治44）頃	画帖（水彩・紙）
吉田博	『琉球』より「石灰製造所」	1912（明治45）	画帖（水彩、パステル・紙）
吉田博	武州飯能町、入間川辺	1894（明治27）-1899（明治32）	鉛筆、淡彩・紙
吉田博	花のある風景	1894（明治27）以前か	水彩・紙
吉田博	信州風景		鉛筆、淡彩・紙
吉田博	せと奈いかい高浜港	1928（昭和3）	木版・紙
吉田ふじを	フロリダ	1906（明治39）	水彩・紙
吉田ふじを	土間	1906（明治39）	水彩・紙
吉田ふじを	レニヤ山		水彩・紙（有）ヒノギヤラリー寄贈
吉田穂高	野宴	1959（昭和34）	木版・紙
吉田穂高	昼の国々	1966（昭和41）	木版、亜鉛凸版・紙
吉田穂高	ミニ・ランドスケープス	1972（昭和47）	木版、亜鉛凸版・紙
吉田穂高	私のコレクションよりー白い家、N	1979（昭和54）	木版・紙
吉田穂高	私のコレクションよりー坂道の家、P.M.	1982（昭和57）	木版、亜鉛凸版・紙

## 展示室4 佐藤潤四郎とガラスの神様



佐藤潤四郎  
《オブジェ・ガラスを吹く人》

郡山市出身のガラス工芸作家、佐藤潤四郎が創り出したキャラクター「ガラスの神様」。宙を舞い、戯れながら、溶けたガラスの玉を吹きざおの先に巻き取っては息を吹き込んでいます。ガラスの神様とは、潤四郎のデザインに実際の形を与えるガラス職人たちの化身であるのと同時に、潤四郎の職人たちへの深い感謝の気持ちのあらわれでもあるのでしょうか。

潤四郎のガラスの神様たちが、皆様を清らかなガラスの世界へとご案内します。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
佐藤潤四郎	ガラスで作ろう		水彩・紙
佐藤潤四郎	スタンドグラス・仏足跡		ガラス、鉄
佐藤潤四郎	窯場の神々1		水彩、墨・紙
佐藤潤四郎	窯場の神々2		水彩、墨・紙
佐藤潤四郎	窯場の神々3		水彩、墨・紙

大方竜子氏寄贈  
佐藤久枝氏寄贈  
佐藤久枝氏寄贈  
佐藤久枝氏寄贈  
佐藤久枝氏寄贈

作者名	作品名	制作年	技法・材質	
佐藤潤四郎	花器・馬車に乗るガラスの神様	1973-76 (昭和 48-51) 頃	ガラス/宙吹・サンドブラスト	(株)ノリタケクリスタル寄贈
佐藤潤四郎	植物文一輪挿し		ガラス/宙吹・グラヴェール	
佐藤潤四郎	花器・アダムとイヴ		ガラス/宙吹・サンドブラスト	
佐藤潤四郎	瓶・ガラスの神様		ガラス/宙吹・グラヴェール、プランツ	
佐藤潤四郎	植物文瓶		ガラス/宙吹・グラヴェール	
佐藤潤四郎	大杯・ガラスを吹く人	1986 (昭和 61)	ガラス/宙吹・グラヴェール、プランツ	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	タンブラー		ガラス/型吹・グラヴェール等 (6 点)	
佐藤潤四郎	大杯・ワインを造る		ガラス/宙吹・グラヴェール、プランツ	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	竹に雀文ワイングラス		ガラス/宙吹・グラヴェール、プランツ	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	葡萄文ワイングラス		ガラス/宙吹・グラヴェール	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	ルーマー杯・なみなみのワインを		ガラス/宙吹・グラヴェール、プランツ	
佐藤潤四郎	トリオ・ザ・ガラスの神様		水彩、墨・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	仏の掌に乗るガラスの神様		水彩、墨・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	スタンドグラス原画：燭台になったガラスの神様と女神様		水彩、墨・紙	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	窯場の朝 (ルツボの中)		水彩・紙	大方竜子氏寄贈
佐藤潤四郎	夜空にガラスを吹く神様		水彩、墨・布	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	3人のガラスの神様と影法師		水彩、墨・布	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	硝子の女神	1982 (昭和 57)	ガラスレリーフ	田淵十一氏寄贈
佐藤潤四郎	赤いガラスの神様		ガラスレリーフ	田淵十一氏寄贈
佐藤潤四郎	硯屏・ガラスの神様 (複製)		サンドキャスト	木村四郎氏寄贈
佐藤潤四郎	陶板・天使		陶器	大方竜子氏寄贈
佐藤潤四郎	陶皿に描く 2		陶器	大方竜子氏寄贈
佐藤潤四郎	ガラス作業之図	1984 (昭和 59) 頃	墨・紙	田淵十一氏寄贈
佐藤潤四郎	オブジェ・ガラスを吹く人		鍛鉄	大方竜子氏寄贈

## ロビー展示 彫刻・他

作者名	作品名	制作年	技法・材質	
● 1 階				
細川宗英	装飾古墳シリーズ 9	1963 (昭和 38)	セメント	細川明子氏寄贈
笠置季男	躍進	1958 (昭和 33)	セメント	
アントニー・ゴームリー	量子雲 XXIII	2000	ステンレス・スチール棒	
アントニー・ゴームリー	領域 XIII	2000	ステンレス・スチール棒	
● 2 階展示ロビー				
舟越保武	少女	1956 (昭和 31)	砂岩	
佐藤忠良	群馬の人	1952 (昭和 27)	ブロンズ	
高田博厚	アラン像	1932 (昭和 7)	ブロンズ	
木内 克	女の顔	1965 (昭和 40)	石膏、顔料	和田敏文氏寄贈
● 前庭				
バリー・フラナガン	野兎と鐘	1988	ブロンズ	